

[エッセイ No.19 “極める”のが大好き?!]

本当です。海外生活(旅行ではなく)の経験のある人は、きっと納得してくれるだろう。私たち日本人の食生活は、“異常”に贅沢だということに。日常的にこんなに「国際的」に色々な種類の食事を摂る国民は、実は日本以外どこにもいない。まったく当たり前のこととして、意識もせずに、毎日、今日は何を食べるか、何を作ろうか考える私たち。ああ、選択肢が多すぎる。

もちろんドイツでもイタリアでも、フランスでも、中国でも、他の多くの国でも、自国の料理ばかりでなく、他の国のものも食べる。でもそれは、ある意味「特別」であり、日常の生活の中に“普通に”組み込まれてはいない。日本ではハンバーグやパスタ、中華はもちろんのこと、ほとんど世界中の味を毎日家庭でも再現しているし、「おいしさ」を追求する。レストランのシェフも、「家庭の料理人」も、ベストを求め、求められる。何か新しいもの、おいしいものを見つけると、突然ブームになって日本中に溢れる。どこの国のものだろうと、「美味しいもの」を追いかける日本人の“執念”はものすごい。そしていつの間にか、日本のものでなくても日本風に変化させて、「日本食」のようにもしてしまうし、その傍ら「オリジナル」の味も求め続け、極める。

つい最近、東京の表参道、青山通りで突然長い列に出くわした。若い人がほとんどだったが、そのもとを辿ってみると、新しくできた「生ドーナツ」の販売店。それがどれだけスゴくおいしいものか、一生懸命並んでまで購入するほどのものなのかわからないが、これはほんの一例だ。そして、その並んでいる人たちの写真を撮っている外国の観光客も脇にいた。暑いさなか、「たかが“ドーナツ”」に忍耐力を持って並ぶなんて、きっとやはり珍しい光景だったのだろう。

食するもののおいしいに越したことはないけれど、どうしても並んで購入したいと思うほど、重要なことなのだろうか。ある外国の友人が言った。「日本のテレビを見ると、ドラマでもサスペンスでも、“食べるシーン”がものすごく多いけど、どうして？」私たちは食べ物、特別重視する民族なのか？

デパートの地下に行っても、「芸術品」が並んでいる。見た目の美しさを追及したり、おいしいものを求めて並んだり…。私はまだそうでなかった時代を知っているし、お昼に日の丸弁当をおいしそうに食べていた職人さんたちを知っている。でも昨今、テレビでは各地の「ソウルフード」の紹介があり、グルメを求めての旅番組、こんなに「食」を追いかける番組が、どこかほかの国にあるだろうか。平和が続き、贅沢を享受できる生活が当たり前になった時代のせいかな。

オカアサンたちが子供に作る「キャラ弁」なんて、欧米の人たちには想像もつかないだろう。何のため、と問われるかもしれない。(あれに、朝どれだけの時間がかかることか!) ドイツ語圏の子供たちのお昼ご飯なんて、黒パンにバターか、ハムかチーズが挟まったサンドイッチとリンゴ一個、なんていうシンプルなものがごくごく普通だし、列車の中で大人がお昼にカバンからおもむろに取り出すのも、それとたいして変わりがない。だから日本に旅行に来ると、あの「駅弁」の豊富さと美しさに、多くの外国人が魅了されるらしい。

もしかしたら、「舌」のせいというより、すべてに対しベストを求める、追及して極めることを是とする、私たちの“精神”が表す世界の象徴なのかもしれない。

野菜や果物もとにかくおいしく美しく。見かけが悪いと「規格外」として扱われる。「見かけ」もベストを求められ、極められている、ということだ。コンビニのヨーグルトもお菓子も、種類だけでなく質もどんとすばらしくなっている。

食べるものばかりでなく、とにかく“極める”姿勢そのものが好きなのかも。サウナ、スポーツ、料理、などなど取り組む分野すべてにおいて、追及し、極めて、一番を目指す。自分の国のものでなくても、だ。そうそう、コンピューターの国際競争の話で、「2位じゃダメなんですか?」と言った某国会議員には、多くの非難が飛んだ。一番を目指すのは、お寿司とすき焼きと相撲と柔道と将棋と日本酒だけではダメらしい。

一方で、本当にすごいこと、と言わざるを得ない。日本人がスペイン料理のパエリアコンクールで優勝し、フランスのボーキューズ・ドールという国際料理コンクールで賞を取り、ソムリエでも世界一を目指し、野球の大谷選手は本場のアメリカでMVP に選ばれ、スポーツのほとんどの分野では世界のトップクラスに入り、評価される。ドイツ由来のお菓子として日本でポピュラーな「バウムクーヘン」は、ドイツでは“高級”過ぎて、皆あまり食べないとか。そう言えば、私も40年以上にわたるヨーロッパの生活の中で、お店でバウムクーヘンを売っているのにお目にかかったことはなかった。(いつも、日本で食べた。)

ひとつ立ち止まって想像してみしてほしい。日本では、フランスよりおいしいフランスパンが手に入る店がある、という話を読んだが、もしアメリカのキャンサスシティで、アメリカ人のやっている、本場よりおいしい讃岐うどんの店があるって聞いたら、“普通”だと思いませんか?!

そしてなんの分野でも、どこかの国で、日本人が少しでも活躍すると、国内のニュースですぐに「報告」される。こんな国はどこにもない。(ピアノのショパンコンクールで反田さんが2位になった時、日本中がこの話題で持ちきりになった。あまりにも2位の反田さんの話しか出なかったのも、私はてっきり1位なしの2位、つまり優勝した人はいなかったのだと思い込んでしまったくらいだ。)

ちょっと横道に逸れる。

何十年昔のことになるだろう。覚えている人たちはいるかもしれないが、ピアノを習っている学生の間でもものすごく流行った、ある「器具」があった。描写がちょっと難しいのだが、一センチほどの厚みの、それほど大きくない平たい木型で、一つの面に丸い突起が、ある間隔で5個ついている。

つけられた名前は忘れた。どのように使うか、一般の人には見当がつかないだろう。でも、電車で座って友人と話しながら、片手を“それ”に添えて、「指を鍛えて」いた少女たちの姿は、今でも目に浮かぶ。実際の演奏家ではなく、どこかの音楽教室のピアノの先生が開発したと聞いた。「特許」も取ったとかいうこのシロモノは、音楽をナリワイとしている人たちにとっては、正直、ちょっと“不気味”だった。

なぜか。まあ簡単に言うと、「指のためのジム器具」という感じだったからだ。“ジム”で「音楽の心」は育たない。(その昔、ドイツの作曲家ロベルト・シューマンは、弱い薬指をピアノ用に鍛えるため、妙な訓練方法を編み出したという話も残っているが。)目の前に座っている、ピアノを習っているらしい生徒たちは、電車の中、その器具でいろんなことをやっていた。

クラシック音楽の演奏家は、いわゆる「職人」のようなものだ。コツコツと忍耐強く練習しながら、ひとつずつ“何か”を会得して積み重ねていく。多分ダンサーやアスリートもそうだ。そして極めていく道程を見つめながら先へと進んでいく。

ただ、芸術に携わる分野には、数字で表わせる「絶対評価」はない。コンクールやオーディションは？と問われるかもしれないが、そこでの順位や優勝は、大雑把に言えば、「審査員個人の趣味」に大きく左右される。もちろん、必要とされる基本テクニックの水準は前提としてあるが。

歌い手の場合、人それぞれの顔と同じように、本当にいろいろな声質や響きがある。男性、女性だけでなく、ソプラノ、テノール、バスなどの声種もあり、それらをいったいどうやって一列に比べて、“絶対的”な評価をつけるというのだ？！

器楽の分野ではもう少し評価がつけやすいかもしれないが、でも「指がものすごく速く動く」ことと「音楽をする」ことは繋がらない。というところで上記の「器具」をちょっと説明してみよう。

確かにいろいろと考えられていた。付いている突起は、手のひらや指をできるだけ大きく広げて、なるべく幅広く鍵盤に届く訓練のために配置され、実際に目の前にいた少女たちは、お喋りをしながらも、「器具」を持って指の間を広げる作業に余念がなかった。(指の間の「水掻き」を伸ばす感じ？！)そしてもっと驚いたのは、その突起自体が何のためにあるか、ということだった。

それらは、手のひらを固定しながら、それぞれの指を一本ずつ、(例えば一分間に)その突起をどれだけ速くたくさん“打つ”ことができるか、を訓練するためだった。

専門的に言えば、一つの指を動かすのは「指」そのものではない。腕から指先までの筋肉やら関節やら神経の流れをきちんと意識して(把握して)使う。だから、これはその視点からも無意味な訓練方法だったはずだ。それでも一時期、ものすごく流行った。突起を指で1分間に何回打てるか、確かその指標回数も決められていた。でも幸いなことに、これはいつの間になくなった。この無意味さが、というよりもかしたらその弊害が認知されたのかもしれない。音楽上の意味合いばかりでなく、この器具のせいで、実際に腱鞘炎になった生徒たちも多かったのではないだろうか。それに、指の速さだけを極めても、自分の心を動かすことはできない。自分の心が動かなければ、聴く人の心を動かす音楽はありえない。

ウィーンの音楽家の友人に言われた。

「日本人は“ナントカ道”が好きだよ。茶道、華道、弓道、相撲道、云々…、なんか突き詰めるといふか、凝るといふか、極め続けて“道”にすること自体が好きなのかな。」

もちろん、極めたいという気持ちがなければ、「職人」としての進歩はないだろう。でも彼が言いたかったのは、多分、音楽には、クラシック音楽でも遊びの心が必要、音を楽しむと書き、人にそれを伝えるのだから、くれぐれも「音楽道」にはならないでほしい、ということなのだと思う。(ウィーンの音楽の特徴は、「なんとなくダラシナイ心地よさ」と言われるくらいだし。)

様々な大会では、「勝つ」ということ、一番になること、「優勝」することは大切かもしれない。でも、ある著名な元プロのラグビー選手の言葉が印象深かった。

「勝ちたいという気持ちは皆もちろんある。でも目的は“勝ち負け”ではない。勝つまでのプロセス、内容の充実だ。だから“勝利至上主義”ではいけない。勝ち負けだけが大事なら、じゃんけんで決めたっていいはず。」

常に勝負にこだわっているように見える大谷選手やイチローさん、将棋の藤井名人、スケートの羽生さんなどの姿が、あの強さの一方で、なぜか爽やかに見える理由はそこかもしれない。大谷選手からは、とにかく野球が好きという気持ちがプンプン伝わってくるし、藤井名人は「面白い将棋を指すのが一番の目標」と言ったそうだ。“外から評価される”ことより、自分の夢に向かって進み、その夢を叶えるために努力を続ける。そして私たちはその姿に感銘を受けている。「道」を究める、極めるといふその心は、本当に美しいすばらしいと思う。(私自身はナマケモノなので、彼らの姿に驚嘆し、憧れるばかりだが。)

横道へ逸れ過ぎてしまった。

とにかく、極められる分野がこの世の中、ものすごく多い。食べ物にしてもスポー

ツにしても、芸術や音楽にしても、「好き」の種類がやたらと枝分かれしている。その枝が増えれば増えるだけ、それぞれの「枝」をそれぞれが極めていく。その分、コアの“ファン”の数は、逆に(振り分けられるので)どんどんと少なくなる。

私たち日本人は、なぜこんなに様々なものを求め、消化し、当たり前前に生活に取り入れるようになったのだろう。サッカーがありバスケットボールがありバレーがあり、ラグビーがあり野球があり、卓球がありテニスがありバドミントンがあり、もっといろいろ、いろいろ。その中で、これこそが私たちの日本、と言えるものはいったい何？ だって全部すごいのだもの。スケートもすごい、水泳もすごい、スキーのジャンプもすごい、ダンスもすごい、こんな国は本当はない…。

音楽においてもそうだ。クラシック音楽、歌舞伎、ジャズ、Jポップ(正直なところ、私はJポップとKポップの音楽的違いはわからないのですが)、ラップ、ロック、レゲエ、サルサ、スカ、パンク、もっともっと。その中に日本民謡があり演歌もある。これらを皆が全部均等に咀嚼できるはずもないけれど、こんなに様々な色合いの文化を当たり前前に受け入れている国なんて、本当はない…。個々の心の感覚の違いをそのまま受け入れて育てている、ということなのだろうか。国境がない感覚、とでも言えるのかな。本来とてもいいことのはずだけれど、普段の生活は(ガラパゴス化、と言われるように)「内向き」に見えるのだが…。

再度振り返れば、この「国境のなさ」は食べ物の分野においても全く同じ。そしてこの姿勢を不思議とも思わない。もしかしたら、これこそが現代の“日本的”な姿?!?

そうだ、今の時代、せっかく一位を目指すなら、ジェンダーフリーとか、LGBT(Q)の問題とか、民度とか人権とか難民問題などで、世界トップとして評価されたいですよね、ね…。